News Letter

第17号

京大農薬ゼミ

目次 Contents

1 ゼミの活動から

・耕作放棄ミカン園・・・・・・・・2
・緑の革命・・・・・・・・・・・・4

2 新人レポート特集

・本当の勉強とは・・・・・・・・・5
・新人のぼやき・・・・・・・・・・7

3 みかん山だより

・山桜とミカン山・・・・・・・・・9
・アンケートから・・・・・・・・10
・今年の農薬ゼミ・・・・・・・・11

耕作放棄ミカン園

飯塚弘明

農薬ゼミがお世話になっている仲田さんの紹介により、今年の３月から耕作放棄された蜜柑園の手入れを始めました。この蜜柑園の地主さんは仲田さんと同じ集落の方です。そこのご主人がおととしの３月ころ亡くなられて、手が回らずそのままになっていたというのがこの園の経緯です。以下に今年行ってきた作業を簡単に記しておきます。

４月　間伐、緑肥植物（ヘアリーベッチ、ライ麦）の種まき
５月　接木（夏みかん、青島温州蜜柑などの高接ぎ）
６月　草刈り、枇杷の収穫
７月　草刈り
８月　摘果、間伐
９月　摘果、間伐の整理、緑肥植物（ヘアリーベッチ、ライ麦、クローバー）の種まき
10月　摘果、間伐の整理、緑肥植物の種まき、収穫
11月　緑肥用樹木（モリシマアカシア）の植え付け、収穫、間伐の整理、枇杷の摘らい

まあ、ざっとこんな感じです。

４月には蜜柑の木が大変込み合っている状況であったものを風通しの悪さによる病虫害の被害を避けるべく、また作業をやりやすくすべく間伐を行いました。150本ほどあった木を半数ほどに減らしました。緑肥植物（ヘアリーベッチ、ライ麦）の種まきというのは、園の木の下に生える雑草を抑え、かつ植物自体の有機物の補給という目的で行いましたが、本来秋蒔きすべきものを蒔いたせいかほとんど成長せず、この目的は果たせずに終わりました。

５月の接木というのは、園内から５本の木を選んで品種の更新に使われる技術の見習いとして、熊野の農家である市川さんのご指導のもと行いました。木を主な幹だけ残して切って、その切り口に上記の品種の枝を接ぐというものでした。

６月の枇杷の収穫というのは文字通り収穫です。園には枇杷も数本植わっており、ちょうど時期が合いましたので収穫を行いました。おいしかったです。

６，７月の草刈りというのは文字通り草刈りであります。緑肥植物による雑草抑制がうまくいかなかったこと、間伐によって日当たりが良くなったことなどにより、夏には見事に草が繁茂してくれました。刈った草はそのまま園内にしいておきましたので、植物自体の有機物の補給という意味ではよかったのではないかと思っています。

８，９，10月の摘果というのは要するに間引きのことです。蜜柑の木は実を必要以上にならせすぎてしまう性質があるので適当に間隔を空けていまだ青い実を落としてやるのです。大して今年は実をつけないであろうとたかをくくっていたのですが、それはとんでもないことで、うじゃうじゃと実を成らす木が多く、今年の作業の中で最も手間取ったものです。

８月の間伐というのは、４月に行った間伐が耕作放棄された園全体の半分程度でしたのでさらに拡張して園全体を手入れ

する目的で行いました。この間伐により園の木は 120 本程度になりました。

9，10 月の緑肥植物（ヘアリーベッチ、ライ麦、クローバー、アブラナ）の種まきというのは春に失敗したのでちゃんと秋蒔きをしたということです。すでに順調に生育を始めたところもあり、今後が楽しみです。

10，11 月の収穫というのは文字通り蜜柑の収穫です。今年は夏に雨が少なかった成果、熟す時期が例年と比べて早まっている模様です。本来ならば、この園の収穫は 1 月頃になると聞いていたのであわてて収穫をしているところです。大学の学園祭での販売に向けて計画を練っている今日この頃であります。

11 月の緑肥用樹木（モリシマアカシア）の植え付けというのはマメ科の樹木を植えることにより土を肥やしていこうと考えてのことです。この木に関してはいろいろと難点も考えられますが、長所としては 1 年中成長するため天敵保護樹になる、幹からタンニンが採れる、などがあげられます。今後の成長を見守っていこうと考えています。

また 11 月の枇杷の摘らいというのは枇杷の花の間引きのことです。枇杷の実はこれから寒い時期にかけて成長していくのですが 1，2 月頃の最も寒い時期に大きくなりすぎてしまうと凍障害を受けてしまいます。そこで今の時期にこの摘らいをしておくと実の成長が遅くなり凍障害を受けにくくなるというメリットがあるのです。

この 1 年の流れを振り返って見ました。いろいろとやって見なければわからないことも多くとても面白いです。では皆様よいお年をお迎えください。（いいづかひろあき＝農学部 3 回生）

省農薬ミカン園情報

今年の使用農薬

・マシン油（殺虫剤、1/14・18・19 使用）

・ラウンドアップ（除草剤、3/25・26 使用）

・サンマイト（殺虫剤、8/18・19 使用）

生産者：仲田芳樹

緑の革命

大島渉

私はゼミを通じて「緑の革命」に強い興味を持ちました。今回はこの事について書きたいと思います。

「緑の革命」の目的とは何だったのでしょうか。20 世紀半ばに端を発するこの革命の目的は、「(主に貧しい地域での)爆発的な人口増加を背景として世界の食糧生産を高める」ということでした。

これはアメリカの農学者によって提唱され、彼はその功績を認められて 1970 年にノーベル平和賞を受賞しています。確かに「緑の革命」は 1960 年代から 1970 年代にかけて世界の食糧生産に大きな影響を及ぼし、当初は飢餓が世界から無くなるといわれていました。それではどのようにしてこの改革は進められたのでしょうか。

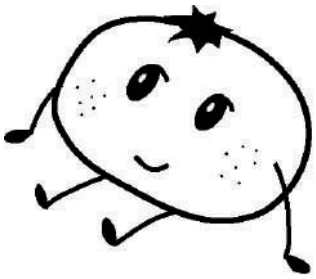
まず収穫量の大きい作物を品種改良によって作り、それまで伝統的な農業を行っていた地域(すなわち単位面積あたりの収量が大きくない地域)にこの品種を導入することによって、「緑の革命」は進められました。補足ですが、品種改良はアメリカのロックフェラー財団とフォード財団、またフィリピン政府の協力の下に行われました。そして品種を導入した国というのはいわゆる発展途上国といわれる国々です。

皮肉なことに、今日では「緑の革命」を議論する上でその負の側面が強調されてきています。それでは、この革命の問題点は何だったのでしょうか。

基本的に緑の革命は、相対的に恵まれた地域において、高収量品種、灌漑設備、肥料、農薬、また特に管理方法を組み入れた技術対策を適用することに依存しています。つまり、緑の革命の結果、伝統的な農業を行うのが難しくなってしまったのです。大量の水、大量の肥料、農薬を使い、種は種子会社から買うことになります。農民は結局、借金をして、近代的農業に必要なものを企業から買い入れます。農民の稼いだお金はそうした先進国の企業や金融機関に吸い取られていくという構図ができてしまったわけです。なお、地域に合わない農業をしたことで、砂漠化が進んでしまったという説もあります。

現在、ご存じのように、発展途上国では飢えに苦しむ人たちが大勢います。結局、緑の革命は先進国の企業が富を築くだけの結果に終わったのではないでしょうか。

今まで、発展途上国になぜ飢えた人々が多いか、なぜ発展途上国は貧しいのかという理由を、漠然と発展途上国自身のせいにしていた私にとって、緑の革命を知ったことは非常に衝撃的でした。このことを一通り書き終えて、私の文章を終えようと思います。読んで下さった方々、ありがとうございました。(おおしまわたる=農学部 2 回生)



2005 年 11 月秋調査　撮影@ミカン園

本当の勉強とは

太田健

今年の四月に京大農学部に入学し、その後すぐに農薬ゼミの活動に参加するようになりました。そして農薬ゼミに初めて参加した日から早くも半年以上がたってしまいました。農薬ゼミでは勉強会形式の普段のゼミ活動とミカン山でのミカン園の調査、ミカンの収穫・販売の２本柱で活動を行っています。僕が農薬ゼミに参加しようと思い立った本来の目的は、「農学部に入って農業を語る以上、それ相応の経験が必要だ」と考えていたからでした。つまり、ミカン山での活動に魅力を感じ参加することにしたわけで、普段のゼミ活動には大学生らしい新鮮でかっこいい響きはあったものの、それはいわば、のどが渇いたのでコーラを買いに行ったらたまたまついていたおまけのボトルキャップくらいのものでした。

普段のゼミ活動では毎週僕たちゼミの参加者がテーマを決めてそれについての勉強をしています。前期は担当の日を割り当てられ、その日に自ら設定したテーマについて調べてきて発表するというものでした。お茶について、ミカンの接木についてなど個性のある発表が聞けました。そして後期はテーマを一つにしぼり、それに関する本を一冊選び輪読しています。テーマは「遺伝子組み換え食品とその流通」。本は『アグリビジネスと遺伝子組み換え作物』。去年まで高校生で受験勉強しかしていなかった僕にとって、そして少々幼い僕にとって、去年までは憧れであった、本当の勉強がここにはあると感じさせる内容です。半年間このような活動を続けていると、いつの間にか「勉強するのも結構楽しいじゃん」という思いまで湧いてきて、まるでボトルキャップを集めることに夢中になっているようです。もちろんコーラは忘れずに飲み干しますが。

ゼミに参加することで、今まで知らなかったことを知ることができていること

は最高に楽しいことです。しかし、大学一年生からゼミに参加することにはそれ以上の価値があると僕は信じています。

まず第一点として、ゼミというものを早い段階で知ることができるということ。僕の場合、カリキュラム上ゼミという形式で本格的に勉強し始めるのは３年生になってからです。またそのゼミでは４年生も相手にしなければなりません。それまでにゼミに慣れておけば、後はひたすら知識を得ることだけに集中できるのではないでしょうか。そして他の同級生に差が付けられるのでは…。

第二点は、常日頃から上級生や院生のみなさんを相手にしているということ。質問をする訓練や自分の意見を述べる訓練になります。高校時代から先生には怖がらずになんでも質問しなさいとよく言われたものです。しかし、質問するのは案外気後れしてしまうものです。高校レベルくらいならまあ質問なんてしなくてもある程度何とかなったものです。でもこれからはそれでは何とかならないことのほうが多いと思います。さらに、自分の意見もろくに発表できない人が信頼を得て雇ってもらえるはずがありません。実際、授業中に質問したり、教授に意見したりもするようになってきました。

大学に入ってこれから四年間そこで過ごすことになると思うと、入学当初の意気込みやこれからの目標を忘れがちです。僕の場合、農薬ゼミでしたが、このようなゼミの活動のなかででも、自らの指針として勉強していくのは悪いことではないと思います。友達からは無条件で「すごい！えらい！」とか言われたりするという特典もついてきますし。だからどうっていうこともないんですけど、農薬ゼミを選んだ僕の選択は正解だったと言えるのではないでしょうか。（おおたたけし＝農学部１回生）

2005 年 3 月剪定　撮影＠悟の家

新人のぼやき

小川詩乃

●蜜柑園

初めてミカン園に行った日。前日までレポート作成に追われ、行く直前までバイトをしていたため、疲れで車の中で爆睡。目が覚めると、そこは山奥だった。さとるの家は、何てところにあるんだろうと思ったものです。

いざミカン園へ。地形の問題からだろうか、ミカン園は段々ではなく、斜面に蜜柑の木が植えられていた。すごい斜面で、登るだけでしんどい。こんな条件で仲田さんはミカンの手入れをされているんだな。こんなことは実際にミカン園に来ないと分からない。ゼミで、作業をしやすくするために間伐をしたと聞いたけれど、以前はどんなに大変だったことだろう。

毎年行われている病害虫調査スタート。…どこを見たらいいのか分からない。見るポイントが悪いのか、見落としてしまう。夏の調査と、先日行われた秋の調査とすでに２回参加したことになるけれど、未だに調査対象の虫と、そうでない虫の区別がつかず、先輩方に聞いてばかりでした。

蜜柑園には、農薬ゼミのメンバーだけではなく、ＯＢの方、農家の方、他大学の学生の方も来られる。まさに、学生から社会人まで多種多様の人が集まるのだ。そこで知り合った方々から、教えていただくことは数多く、勉強になる。ミカン園での作業の時、交通費も時間もかかるのに途中参加する方々がおられる。やっぱり、これはゼミの活動が社会的にうんぬんといった話だけでなく、集まっている様々な人との交流があるからだろう。

●読解ゼミ

後期のゼミは「アグリビジネスと遺伝子組換え作物」を読み解くことになった。第３回は私の担当。担当が決まってから準備をしなくちゃ…と思い続けていたが、実際に準備をし始めたのは、発表の１週間前だった。

一通り担当のページを読む。…眠い。そう、私にとっては難解な内容でなかなか前に進まない。仕方がないから、ポイントや分からない所を書き出しながら読んでいくことにした。

レジュメを作る。これは、もちろん先輩のレジュメを見ながら、見よう見まねで。分からなかった所はネットで調べてみようなんて思っていたが、いざ調べてみるとヒットしたのが英語で諦めたりもした。なんとか当日に仕上げて、いざ市民研へ。

石田先生はカザフへ出張中、ゼミメンバーも忙しい時期だったらしく、総勢６名でのゼミだったが…緊張で頭真っ白。言うべき事はちゃんと考えてきたのに、つまづくつまづく。その度にフォローして下さった先輩方に感謝感謝です。結局は、知識のある先輩方に、私が分からなかった所の質問タイムになってしまい、普段の半分の時間でゼミが終わってしまいました。その時は残りの時間で今後の予定の確認などをしたから良かったものの、冷汗ものです。

次の発表が恐ろしい反面、次こそはもっと、ちゃんとした発表をしようと思うのでした。

●ミカン販売作業

ミカン販売作業は注文をしていただいた方に注文書を送るところから始まる。私は注文書を送るための切手を買う担当になった。おっちょこちょいの私にとって切手を買うというごく単純な作業は、ハプニングの連続となった。まず、80 円切手を 1500 枚買うから、120,000 円を用意しなければいけないのに、何をどう計算間違えたのか 12,000 円しか持ってないまま郵便局に行き、あわてて市民研に農薬ゼミの通帳を取りに行ったのを覚えている。

次に例年は作業を効率良くするために、シール型切手を用いるのだが、すっかり忘れていて普通の切手を買ってしまった。その日の夜に気がついて、慌てて次の日に郵便局に連絡したが、シール型切手は在庫がほとんどないうえに、交換は手数料が（1 枚につき 5 円 !!）かかるとのこと。それを聞いた時は絶望的な気分になりました。幸い、心優しいメンバーのおかげで咎められることもなく、手作業で一枚一枚、切手を貼ることになったのです。（そんなわけでたまに切手がいがんでいたり、破れてしまったのでした）

さて、注文書を発送した後は、次々と市民研に注文書が届きます。その内容をデータベースに入れる作業及び電話番の日がやってきました。「たいがい誰かいるから分からなかったら聞けばいいよ」その言葉に安心し、普段のゼミ活動と同じような足取りで市民研に向かいました。市民研の窓から明かりが見えたので、先生か先輩がいらっしゃるのだろうと安心してドアを開けると‥‥そこには知らないお兄さんとお姉さん。そう、市民研は市民研や農薬ゼミ、石田先生にゆかりのあるひとなら誰でも入れるため、私の知らない人がいる可能性もあるのです。でも、想定外のことだったので、入り口にポカンとつったってしまいました。その日は金曜日だったため、例年はゼミ活動の日であり（今年の後期から火曜日に移行しました） ミカン注文ついでにふらっと立ち寄られる方がいらっしゃるのです。

その日はたまたま一人だけの対応となり、せっかく市民研に足を運んでいただいたのに、注文書の保管場所が分からなくて対応できなかったり、データベースへの打ち込み方が分からなくて長い間お待たせしたり、電話での対応でお名前を間違えたり…この場を借りてお詫び申し上げます。本当に申し訳ありませんでした。でも来年新しく入ってきた人には、せめて初めての時はついてあげたいな…新人のぼやきでした。（おがわしの＝理学部 1 回生）

＊心細い思いをさせてごめんなさい（先輩のつぶやき…） お兄さん、お姉さん方、いつでも遊びに来て下さいね。

2005 年 11 月秋調査　撮影＠悟の家

山桜とミカン山

石田紀郎

今年も途絶えることなく省農薬ミカンの調査・収穫・販売ができました。これで調査は 25 年を越え、販売は 20 年近くになります。よくぞ続けてこられたものだと自画自賛しながら、とくに若い学生諸君が途絶えることなくつないでいることに驚嘆しています。

大学の中にはいろんな学生の集団がありますが、農薬ゼミのような現場を持ち、現場を維持する活動を 20 年以上も続けている集団はありません。しかも、農薬全盛の時代に次の時代を見越したと言うべきか、それとも時代を切り開いたと言うべきか、いずれにしても先駆的存在です。朝日新聞社の「明日への環境賞」に 2 年連続で応募しましたが、残念ながら受賞はなりませんでした。名前が京大農薬ゼミだから大学の正規の研究室のように思われているようです。生産現場から消費現場まで深く関係し、農家を支えて、問題提起をし続けている正規の研究室がどこかにあれば朝日新聞に教えてもらいたいものです。

そんな長年の和歌山通いですが、今年は大発見をしました。ミカン箱に一枚の絵はがきが入っていますのでご覧下さい。省農薬ミカン園を山桜の木々が取り囲み、ミカンの春の芽吹きを見守っているような風景です。毎年 5 回はミカン山に通っているのですが、春 4 月は学期始めで忙しく、 3 月と 5 月は行くのですが 4 月は抜けていました。今年は意を決して省農薬園を訪ね、この風景を見ることができました。扇形をしたミカン園の周りに、これほどたくさんの山桜の木があったとは。しかも、ちょうど満開に出会えたのです。まるで桃源郷のようですねと言ってくれた人もいます。安全な生産環境で、安全な作物を、安定して生産し続けることこそ農業の使命であり、それ支えるのが農学のもっとも大事な命題です。それを実現しつつある省農薬ミカン園は桃源郷に近づいているのかもしれないとでも思っておきましょう。

今年のミカンをお買上げいただいた方々にもぜひ見てほしい風景です。ぜひ一度、私たちのミカン園にお出かけになりませんか。ご希望の方はご連絡ください。（いしだのりお＝NPO 法人 市民環境研究所代表理事）

アンケートから

山崎香織

昨年度のミカン販売では、アンケートに対する回答を 100 通近く頂きました。お客様の反応は、販売に関わる私たちと仲田さんにとって一番の励みでもあり、今後に役立つ批判でもあります。ここでは、よく寄せられるご意見やご質問を紹介します。省農薬ミカンがもっている様々な面を知って頂ければ幸いです。

最も多いご意見としては、「安心して食べられる」「本物のミカン」というものです。食の安全性への関心が高まる中で、生産者の顔や想い、生産過程が明確に分かる省農薬ミカンの理念に共感して下さる方々が多いことが感じられます。お客様からは「日本の消費者に余りに商品の姿、形にとらわれて本当の美味しさを忘れてきているように感じます。有言実行の本当に実のなる研究をこれからもがんばって下さい。」「News Letter は生産過程の様子やご苦労 etc、詳細に報告がなされているので自分の食べているみかんがどのように手元に届くのかがよく理解できる。」というご意見が寄せられました。また、皮を粉末にして摂る、生ゴミ堆肥、シソ栽培の虫除け、漢方、ミカン風呂など、省農薬を活かした様々な利用法が寄せられました。

次に多いご意見は、「昔懐かしい味」「酸味が強い」というものです。ミカンの甘みや酸味は、主に品種によって決まります。省農薬ミカンは、病害虫調査の継続性を考慮して、植え替えを控えた経緯があります。そのため、市販のミカンは酸味がなく糖度の高い品種ですが、省農薬ミカンは「宮川早生」という昔懐かしい甘酸っぱい品種です。そのため、「やっと昔ながらの味に出会えた」と感動して下さるお客様もいれば、「酸味が強くて、甘みがない」と好みに合わないと感じるお客様もいます。また、センサーで糖度を判別し、糖度が高いものだけを商品とする流通形態ではなく、できたミカンをすべて販売して一本のミカンの木を丸ごと味わって頂く方針を採っているため、ミカンによって味に個性がある点も、省農薬ミカンの特徴と言えます。

また、ミカンの大小についてのご意見もよく頂きます。例えば、「箱に大きなみかん、小さなみかんがとり混ぜて入っているのが嬉しいです。規格された大きさのものばかり並んでいるより、なんだか『みかんの木からとれたんだぞ』とみかんが言っている様に思えるのです。」「箱を開けてあまりにも大小がありすぎてびっくりしました。小さすぎるのは省かれてはどうでしょう。」といったご意見です。ミカンの木には、様々な大きさのミカンが生ります。また、仲田さんは手選別で一つひとつ確認しながら箱詰めを行っています。そのため、箱に入っているミカンは自信をもってお届けできるものと考えていますので、お腹の空き具合や、気分によって、いろんなミカンを味わって頂ければと思います。「大きなみかんがありました。鏡餅の代わりにしましょう。」というユニークなご意見もありました。

アンケートで傷んだミカンの個数をお聞きしたところ、０～３個という回答がほとんどでした。「傷みが早くて捨てるところが多くてもったいなく、困りました。」というご意見もいくつか頂きました。上述のように、仲田さんが手選別で傷のないミカンを箱詰めしていますが、ミカンは生ものなので、収穫後に殺菌やくん蒸を行っていない省農薬ミカンは天候によってはどうしても傷むことがあります。

市販の場合は傷んだミカンを省いた上で、小分けして販売することが可能ですが、仲田さんの元から箱詰めで直接お手元に届く場合はそれができません。そのため、予め傷みの分を考慮して多めに詰めておりますので、少量の場合はどうぞご理解下さい。届いた段階で腐りの数が多い場合は、交換することもあります。受け取った後は、箱から出して乾燥させることをお勧めします。

今年度も、ニュースレターとともにアンケート用紙をお送りします。是非、ミカンを食べた感想や、活動に関するご意見等をお寄せ下さい。よろしくお願いします。（やまさきかおり＝農学研究科修士1年）

今年の農薬ゼミ

山崎香織

今年の農薬ゼミは、2つのテーマを軸に進みました。1つは、今年から取り組み始めた「耕作放棄ミカン園復活プロジェクト」に関するものです。間伐や接ぎ木、緑肥の計画を立て、技術について事前に調べました。そして、仲田さんや、農薬ゼミ御浜支部（?）ミカン農家の市川茂昭さんに教わりながら、実際にやってみました。接ぎ木の技に驚き、生命力の強いクズと戦いながら、ミカンの手入れを行いました。

もう1つのテーマは、遺伝子組み換え技術です。遺伝子組み換えの表示が一般的になった一方で、遺伝子組み換え作物と植物の利用普及を進める動きが、研究者やアグリビジネス企業において見られます。遺伝子組み換え技術とは何か、推進派と反対派の意見はどう違うのか。まずは基礎から学び、後半は「アグリビジネスと遺伝子組み換え作物」という本を題材にして、種子産業の動向を踏まえた議論を行いました。また最近、国内でも遺伝子組み換えナタネのこぼれ種による在来種の汚染が見つかっています。京都の鴨川における調査に参加したゼミメンバーが、ゼミで調査報告を行いました。

他には、茶栽培の現状、農薬裁判の経緯、地球温暖化とミカン害虫の関係等についての話題提供があり、様々な分野を知る機会となりました。

省農薬ミカン園の調査は、夏・秋の2回行いました。調査対象のカイガラムシ7種の中でも比較的見つけやすいヤノネカイガラムシ以外は、なかなかお目にかかることがなく、木の下にもぐり、葉や枝を丹念に見ながら病害虫調査をやりました。収量調査では、1本の木に文字通り「数え切れないほどの」ミカンがなっている光景に圧倒されつつ、ミカンをほおばりながら、にぎやかにミカンを数えました。昨年と同様、間伐調査も進めています。（やまさきかおり＝同上）

京大農薬ゼミ

自主活動ゼミ
1978 年京都生まれ
京都大学農学部

1967 年和歌山のミカン園にて起きた農薬中毒事件をきっかけに、「農薬は減らせる」を合い言葉に、学習活動を続けています。

ゼミの特徴は、単に「農薬は減らせる」と主張するだけではなく、和歌山のミカン園をフィールドとして、実際に農薬を省いたら農業はどうなるのか、農薬を減らして栽培したミカン園では害虫や病気がどのようになるのかを、栽培に関わりながら実践的に調査研究を続けてきました。

その調査のための基本となる農薬や環境に関する知識や理論を勉強するゼミを毎週火曜日に開催しています。興味を持って下さった方は、お気軽に下記の問い合わせ先にご連絡の上、是非一度足をお運び下さい。

著作：『省農薬ミカン栽培の可能性～病害虫被害解析と経済分析～』（1996）

ニュースレター　第 17 号

発行所　京大農薬ゼミ
〒 606-8227
京都市左京区田中里ノ前町 21 石川ビル 305
TEL&FAX　075-711-4832(市民環境研究所)
E-mail　kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp
URL　http://dicc.kais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP/homepage.html

2005 年 12 月 1 日　第 1 版発行

ミカンや農薬ゼミに対するご意見、ご批判、ご要望などございましたら、どのようなことでもお寄せ下さい。
みなさまからのお声を励みにして、これからも活動していきたいと思っております。